

—— 第7章 ——

西神ニュータウンはいま

7.1 ニュータウンの変化

西神ニュータウンは、まち開き後20年を経過し、まちの様子はかなり変化してきた。西神中央地区は業務・商業地区を目指してきたが、折からの不況で企業の統合・倒産・リストラで、業務ビルや社宅が容赦なく解体され放出されている。また神戸市も財政難から、駅前未利用地を民間に売却している。それらの跡地には、駅前の利便性から大量のマンションが供給され、一種のマンションブームの観を呈している。これは新規の人口の流入で、ニュータウンとしては活性化になり望ましい面もあるが、一方業務地が減少し、当初計画の副都心機能の衰退につながるのではないかと懸念される。

新住宅市街地開発法でつくられたニュータウンは、建築制限や買戻し特約などがあるが、期限が切れると、用途地域の規制の範囲内で自由に建築が出来る。宗教施設も当初はなかったが、教会が数箇所出現しているし、また理髪店も住宅地の中に生まれた。1戸建て住宅地では自家用車の所有率が上がり、駐車場が不足し周辺に公共駐車場が3箇所建設された。

前述のマンション調査の自由記述と面接調査によると、ニュータウンに対しても、既成市街地のような競争性や選択性の高さを求めている。これは、作られた町としてのニュータウンから、自然発生的な市街地になることを求めているようにみえる。一方、建築制限があると財産価値が下がるといわれた建築協定は、西神中央ではかなりの普及率である。このようにこれからは、作られた町を住民が住みこなし、自らの町を作ってゆくことになる。

7.2 全国初の職住近接のニュータウンは

わが国のほとんどのニュータウンは、住宅供給を主たる目的としていたので、イギリスのニュータウンに対して、ベッドタウンと言われてきた。これに対して西神ニュータウンは、新住宅市街地開発法による住宅地に隣接して、工業団地を計画的に建設した全国初のニュータウンである。しかし、約20年を経過したいま、この両団地がどのように融合しているのかの調査はまだない。そこで、2、3の資料などからその後の動きを見てみよう。

平成13年の工業統計によると、西神工業団地（西神中央）とサイエンスパーク（西神南）の就業者は、計12,600人である。平成15年の西神ニュータウンの人口は91,600人であるから、この数字だけでもかなりの割合である。

これだけでは、職住近接の特徴はわかりにくい、関西学院大学の「関西ニュータウン比較調査研究」の結果に興味のある数字がある。これによると、「現在のあなたまたは配偶者の通勤状況について（パート・アルバイトは除く）」から、Q 9. 「あなた（または配偶者）は通勤に電車を利用していますか」のうち、SQ 2. 「利用していない」とお答えの方にお聞きします」“通勤の際に主として利用している交通手段は何ですか”。

これは、通勤に電車を使わなくてもよい人を対象としているので、この回答のうち、徒歩、自転車、バイク・原付、の三項目が職場の近さを示していると思われる。この折れ線グラフをみると、徒歩、自転車、バイク・原付、の三項目では、須磨、西神、千里、洛西が山になっている。洛西の山が高いのは、バイク利用が突出しているからで、近くに鉄道の駅がないこのニュータウンの特別な理由と思われる。そこで、徒歩・自転車で比較すると西神、千里、が山となっている。千里は、ベッドタウンとして開発されたが、その後大阪からの地の利を得て、住宅地の近接地に事務所などの事業所が出来たものと思われる。西神ニュータウンはこの数字から、千里以外のニュータウンと比較して、徒歩や自転車で職場に通える、職住が接近したニュータウンであることが伺える。

朝の西神中央駅には通勤者があふれ、人達は路線バスや送迎バスに流れ、徒歩で工場に通う人も見受けられる。工場の近くでは、広い道路もマイカー通勤の車で混雑している。夜になると、駅前の居酒屋チェーンの店には、会社帰りのサラリーマンの姿も多く、ベッドタウンとはすこし趣をこにしている。

注・関西学院大学社会学部・大谷研究室「関西ニュータウン比較調査研究」
2004. 6. 20より引用

わが国のニュータウンがベッドタウンで、働くところがない、と批判する人は西神ニュータウンを知らない人であろう。開発時は、住宅と工業団地との連携はなく、宅地や分譲住宅は抽選で、工業団地の企業の従業員には、なんらの特典もない“職住近接”であった。しかし、買戻し特約の切れた10年後は、住宅の売買が自由になり、かなりの工業団地の従業員が入居している。いま、数字で示せないのは残念であるが、本来の職住近接のニュータウンにやっとなってきたといえる。

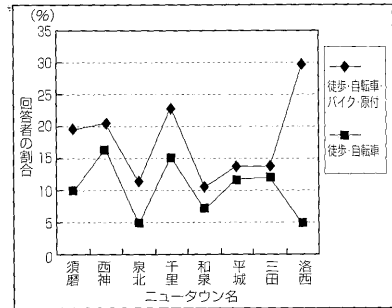


図75 関西NT・通勤手段の比較

この他、西神ニュータウンには、教育という大きな産業があり、約7,000人の学生と、1,000人近い教職員が働いている。この“教育産業”は、ニュータウンの経済に大きな影響力を持っている。また西神ニュータウンには、総合的な商業施設の他、ホテル、百貨店などのニュータウンに付随する多くの三次産業の従事者がいることも見逃せない。

7.3 ニュータウン批判に対して

人口減少の成熟社会に入ると、高度成長期に計画されたニュータウンへの批判が続出している。さらに、都心の地価の下落による都心回帰現象が、あたかも時代の流れのように報じられている。しかし、これら学者や評論家の批判は、ニュータウンにすでに住んでいる人にとっては、あまり気分のよいものではない。居住の自由があるので、決して強制されて入居したわけではないが、当時の日本の住宅政策による金融や制度インフラが誘導したのは間違いがない。そこで、西神ニュータウンを研究対象にしている当会としては、座視するわけにはいかないので、ささやかな反論を試みてみよう。

ニュータウンは1戸建てと共同住宅のみで、住宅は画一的で多様性がない、の批判に対しては、西神ニュータウンには他のニュータウンにはほとんどない“タウンハウス”という形式の住宅がたくさんある。これは、今

までのニュータウンが、1戸建てか共同住宅か、に対していわば庭付きのマンションのような形式である。各戸には小さい庭があるが、数十戸毎にコモングリーンを持ち、環境と住宅とが一体的に設計されている。タウンハウスは共有地を持つので、この管理のための共同作業があり、これがコミュニティを育てる役割を持っている。また防犯には、ストリート・ウォッチャーという、人の目が一番有効なことは知られているが、袋小路を持つ私有地の道路は、犯罪者にとって好まれない住宅地であろう。

わが国のニュータウンは、人口急増対策として急いで計画したものが多く、周辺の自治体や農村と軋轢を生じているところが多い。しかし、西神ニュータウンは戦前から“新都市構想”の長い歴史があり、周辺の農村とトラブルはほとんど起こっていない。それは、わが国のニュータウンのほとんどが、府県が計画しているのに対して、西神ニュータウンは、政令指定都市である神戸市が計画し施行しているため、関係する他の自治体がない。水道、鉄道、小中学校の教育、道路、公園など全て一人の市長の下で調整されている。

したがって、西神ニュータウンの開発は中学校を率先して建設し、ニュータウンと在来の農村との融合を図っている。また、現在もニュータウンの近くの櫛谷川や明石川祭りなどには、ニュータウンの人たちがたくさん訪れている。また、周辺には端谷城址を始め、神社仏閣も多く、私たちの研究会が春秋に行う見学会には、多数のニュータウンの住民が参加している。

ニュータウンは、一斉建設一斉入居で、同じ年齢、同じ社会階層である、との批判がある。これは、新住宅市街地開発法によって建設されたニュータウンの宿命である。すでに、一斉入居の町丁では一斉高齢化の兆しがあるが、新規住宅の建設や転居の勧めなどの施策で、できるだけ一斉高齢化を避けなければならない。そのためには、このような社会の変化に対して、ニュータウンの計画を柔軟に変化させるための装置が必要である。西神ニュータウンの建設継続中の町丁では、平均的な年齢構成になっている。その点、6章で述べたように、新たなマンションの供給は、人口構成の平準化の点からは、歓迎すべき動きであると思われる。

7.4 ニュータウンもふるさと

ニュータウンは、コミュニティがない、ふるさととも歴史もない、と言われて続けてきたが、西神ニュータウンには戦前からの長い歴史がある。ただ、誰もまだ知らないだけである。ここで育った子供たちは、ニュータウンにふるさと意識をもち始めている。大人たちは、自分のふるさとのイメージとあまり違いすぎるから、ニュータウンはふるさとにならないと思うのだろう。自治会も夏祭りなどを催し、地域の連帯を図りながら、思い出を作る行事を行っている。

そこで平成15年秋に、当会が“ふるさと自慢”を募集したところ、小学生を中心に約500通の回答が寄せられた。子供たちは身近な公園や彫刻に愛着を持ち、ニュータウンにふるさとを感じていることが分かった。

注・西神ニュータウン・見所30選 参照

西神中央公園



金同たく

よく遊園地に来たり季節の変化がよく分かるからです。金同たくを選んだのは、ほくとしてシンボルだったからです。

図76 ふるさと自慢応募作品